

## 黄砂にけむる平壤

ERINA調査研究部研究主任 三村光弘

2006年3月11日～18日、北朝鮮の平壤と平安南道の湯泉郡を訪問した。今回の訪問は、朝鮮社会科学者協会や朝鮮社会科学院経済研究所との学术交流と、朝鮮国際貿易促進委員会、貿易経済研究所、朝鮮国際貿易仲裁委員会をはじめとする貿易関係機関との意見交換のためであった。

今回、北朝鮮の経済学者との交流では、北朝鮮の電力事情、中国企業の北朝鮮への投資状況、昨年10月に再開したという食糧配給制度の現状について意見交換を行った。

### 電力事情

電力事情については、『民主朝鮮』紙上などで紹介されている、ICカードに使用できる電力量を記録し、それ以上の電力を使用できないように制御できる「カード式積算電力計」の使用の現状について質問を行った。

電力は増産が行われているが、同時に需要も増えているため、節約を推進することが重要であるという観点から、平壤市内の3つの区域にコンパクト型の蛍光灯を導入しているとのことだった。このコンパクト型蛍光灯は、従来40Wの直管蛍光灯を使用していたオフィスの場合は18W、家庭の場合は14Wと8～9Wの蛍光灯を使用するようにして、電力消費の軽減に努めているとのこと。電力使用量が減少すれば、「苦難の行軍」時期以来使用を制限してきた電気炊飯器など、一部の電熱機器を使用することも可能になる見込みであるようだ。

カード式積算電力計の導入も確認できた。インタビューを行った経済学者が住む地区では、一般家庭の場合、1カ月に使える電力は35KWhであるが、その学者の場合は優遇があり、1カ月57KWh使用できるとのことであった。前月の電力使用量は56KWhで、電気料金として172ウォンを支払ったとのことであった。中国では使用料の前納により、電気料金の収納漏れをなくすために使用されているカード式積算電力計であるが、北朝鮮の場合には、電力使

用限度を守らせるために使用しているようである。電気料金を電力需要を減らすためのテコとして利用してはいいないそうだ。

#### 中国企業の進出問題

中国企業の北朝鮮への進出については、韓国が心配しているような中国による北朝鮮経済の支配といった問題は発生せず、むしろ2005年6月の第10回南北経済協力推進委員会の決定により、基本的には韓国を優先する方針になっているという認識を北朝鮮側はもっているとのことであった。その例として、紡績工場の原料を韓国から輸入していることがあげられた。北朝鮮の経済建設路線の基本は自立的民族経済建設にあり、中国との経済協力においても自国の経済基盤を強化する方向で事業を行っているとの説明であった。その一方、中国が北朝鮮の鉱物資源を中心とした生産現場に投資を行っていることは事実であり、当面は中国から生産機材や資材、燃料などを輸入し、それに見合う生産品を中国に輸出する方式で生産の正常化を推進していることが紹介された。同時に、次の段階では生産した一次産品を加工して輸出するなど、段階的に付加価値を高めていく計画を持っているとの説明があった。

#### 食糧供給について

食糧配給（食糧供給制度）は、農民からの買い入れを新米1キロあたり180ウォンで行い、42～44ウォンで供給し、配給のための補助金（1キロあたり140ウォン）は、人民的施策費から支出されているとのことであった。また、配給では補えない追加的な需要に対しては、市・郡・区域（平壤市の区）単位で穀物販売所を設置・運営し、ここでは量に制限なく「市場価格」（2006年3月現在600～700ウォン程度）で穀物を販売しているとのことであった。コメの補助金を捻出するため、高級酒類やタバコ等の嗜好品の価格を値上げするなどの措置をとっているとのことだったが、外貨ショップで売られている酒類の値段は変わっていなかったため、確認することはできなかった。

2006年4月の第11期第4回会議では、「国の財政状況が困難な中でも農業勤労者の生産熱意をいっそう高め、人民の食糧問題、食の問題を円滑に解決するために巨額の穀物買付補助金を支出した」と報告されているが、もし250万トンのコメに対して1キロあたり140ウォンの補助金を支出すれば、補助金の規模は3,500億ウォンになる。それほど大規模な財政支出は行われていないので、穀物販売所で売られているコメの量が配給されているコメの量の3分の1程度あるため、補助金を埋め合わせるだけの収入が得

られている、配給されているコメは基準量よりもずっと少ない、平壤市や炭坑、鉱山など一部の重要な対象のみに対して全量の配給が行われ、それ以外の地域では配給量が少ない、などの要素が組み合わさっているのではないかとと思われる。まだ、配給制度が復活してから半年しか経っていないので、2007年の最高人民会議で発表される財政報告に注目する必要がある。

穀物の国家独占が行われているが、市場価格であれば量に制限なく穀物を購入することができるとすれば、非国営セクターで収入を得ている人たちも、それなりの業績を上げている限り食糧を得ることができるのではないかと考えた。

#### 貿易関連部署との交流

朝鮮国際貿易促進委員会、貿易経済研究所、朝鮮国際貿易仲裁委員会との交流では、外国経済に関するニュースや外国の市場情報等が国内に不足しており、貿易関係部署でこれを一括してイントラネット（北朝鮮の場合、インターネットに接続していないので、国内のみの接続となっている）で配信していることが紹介された。また、朝鮮国際貿易仲裁委員会は、国際貿易や海外直接投資に関連する仲裁を行っているが、日本の仲裁委員会との連携がとれていないので、日本法に関する解釈や事実関係の確認などが行えず、苦勞しているという話を聞いた。日朝国交正常化が行われ、日朝間の取引が増加した際には、紛争も増加することが予想されるが、紛争を円満に解決する手段を完備しておくことは、双方の当事者の利益に資することになるので、今後日朝双方の商事仲裁関係者の交流を活性化させる必要性を感じた。

#### 湯泉郡へ - 自転車の多い農村や地方都市

学术交流と意見交換の合間に、平安南道の湯泉郡を訪れ



写真 1 湯泉の浴槽（写真左側の穴から湯が出る）

た。平壤から黄海に向かって走ると南浦市に出るが、温泉郡は南浦市から北方に20キロほど行ったところにある。ここは名の通り、ラドン湯泉で有名な場所である。湯泉の休養所はビラ（別荘）形式になっており、各棟にツインルームが4～5室ある。各部屋にジャグジーのような大型の浴槽があり、ここに源泉から引いてきたお湯を入れて入浴する。日本のような大浴場はないので、それだけは残念に感じた。

この湯泉郡は黄海に面しているので、海産物が豊富だ。北朝鮮ではハマグリをガソリンで焼いて食べる「ハマグリのガソリン焼」があると聞いていたので、ハマグリを注文し、実際にガソリンで焼いて食べてみた。車のガソリンタンクからビール瓶にガソリンを移し、木の枝を瓶の口に入れて少しずつガソリンが出るようにしたもので、ガソリンをまんべんなくハマグリにかけながら焼く。強烈な風なので、火が一所に止まらず、煙も強い。火炎瓶と同じなので、瓶に引火しないように気をつけながら焼くこと約5分でハマグリが口を開きはじめた。火が消えるのを待って、ハマグリを食べたが、若干ガソリン臭かった。ハマグリのガソリン焼は風のない日にやらないと、火がうまく回らずガソリン臭くなってしまうそうだ。



写真 2 ハマグリをガソリンで焼くところ

湯泉郡から平壤に帰るとき、農村部を通過した。農村では最近自転車が多く見られる。燃料もいらず、人力でしかも荷物を積んで徒歩よりも速い自転車は貴重な輸送手段のようだった。ここ1年ほど、寒い時期でも外に出ている人々を多く見るが、これは湯泉郡からの帰りでも同じであった。

何台かの自転車の荷台には、ビニール製の大きな袋が結ばれて天秤棒のように両側に引っ掛けられていた。このビニール袋には大きな文字で「大韓民国」とハングルで書いてあった。韓国のコメ支援の時に利用されたコメの包装材



写真 3 農村での新しい交通手段 - 自転車

であるが、石油を産出せず、ビニール製品はすべて輸入している北朝鮮では、コメの袋も捨てずに使われているのかと感心した。と同時に、韓国から来たコメの袋を使っても問題ないくらい南北の関係が認知されていることに驚いた。

帰りに平壤の外港として機能している南浦市を通過した。南浦でも自転車は平壤に比べて多く、街のあちこちで走っている姿を目にした（平壤でも住宅地区では多く見られるが表通りにはあまり走っていない）。自転車は燃料もいらず、それなりに多くの荷物を運ぶことができ、速度もそれなりに出るので、資源が不足している北朝鮮の現状にマッチした乗り物なのだと思う。欧州では環境に優しい乗り物として地下鉄や鉄道の車内に持ち込むことが許されているなど、計画次第では都市交通システムに組み込むことができる乗り物なので、これまで普及が遅れていただけで、今後ますます増えそうである。都市では自転車置き場の整備などを行なうことによって、秩序だって自転車を利用することができるようになれば、表通りを走っても問題ないのではないかと思う。



写真 4 南浦の街並み

### 金策工業大学の電子図書館

2006年2月に金策工業大学に電子図書館がオープンした。今回は、その電子図書館を訪問する機会を得た。電子図書館はその蔵書をハードディスク等の電子記録媒体に記録して閲覧ができる図書館である。この図書館の場合、中国やアメリカの技術系の定期刊物をスキャンすることにより電子化して提供しているようであった。また、紙ベースの蔵書も目録検索により検索できるようになっていた。筆者が検索したところ、日本の書籍も技術系の書物を中心にある程度存在するようであった。



写真 5 金策工業総合大学の電子図書館外観

電子図書館は閲覧だけでなく、イントラネットを利用した情報検索なども利用できるようになっていた。構内の配線は基幹回線がギガビットイーサネット（光ケーブル使用）室内配線はにおいてあるパソコンが100Base-TXまでし

か対応していないので、100Base-TXであるとのことであった。



写真 6 金策工業総合大学の電子図書館内のコンピュータ閲覧室

コンピュータ閲覧室には、中国製のパソコンが並んでおり、学生がコンピュータを自由に利用できるようになっていた。男子学生が多く、何となく脂臭い雰囲気は日本の理系の大学の情報処理センターとほぼ変わらない。

閲覧室の他には、マルチメディア教材（映画や会話練習ソフト等）を使った語学練習室があった。英語と中国語の教材はすでに入っているが、日本語の教材はなく、説明にあたってくれた金策工業総合大学の関係者によれば、日本語の教材の寄贈をしてくれる機関や個人がいれば大歓迎とのことであった。今後、日朝関係が好転した際、日本と北朝鮮の交流を担う人材が必要であるにもかかわらず、日本語の語学教材が手に入らないという理由で日本語ができる人材の教育ができないというのは大変残念だと思った。